

2

次は、中国の『戦国策』（せんごくさく）という本にある話の一部分【A】と、その話についての解説【B】です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

【A】

虎とらが森のなかで狐きつねをつかまえ、さつそくムシヤムシヤやろうとすると、狐きつねがいった。

「これこれ虎よ。わしは、百獣の王として、天からこの森につかわされたものじゃ。そのわしを食うおまえは、天にさからうつもりか？」

虎とらは（注1）どぎもをぬかれたが、まさか、こんな弱そうな獣が王とは思えないので、首をかしてしまった。それを見て、狐はつづけた。

「わしのいうことが本気にできないのじゃな。よし、ではおまえは、わしのあとについてきてみるがよい。森の獣たちが、わしに会ってどうするか、よく見とどければわかるじやろう。」

虎はなるほどと思い、狐のあとにくっついていった。

森の獣たちは虎の姿を見て、みな命からがら逃げだすのであった。狐（注2）がとくとくととして、

「どうじゃ、わしをおそれぬものがあるか？」

というと、虎はおそれいって答えた。

「全く、あなたのご威風（注3）はたいしたものです。すっかりお見それいたしました。」

（村山孚『中国おもしろ古典語典』による。）

（注1） どぎもをぬかれた＝非常に驚かされた。

（注2） とくとくととして＝得意げな顔をして。

（注3） 威風＝威厳のある様子。

【B】

当時の中国は、七つの国が天下を争っていた。その中の一つ、楚その国の王様は、強大な力をもっていた。しかし、実質的な指図さしずをしていたのは、王様が任命した宰相さいしやう（王様を補佐する人）だった。ある日、王様が家臣たちに、

「他の国々では、わたしよりも宰相をおそれているといううわさを聞いているが、本当なのか。」

と尋ねた。これに対して、魏ぎの国から来ていた江乙かういつという人が答えるときに用いたのが【A】のたとえ話である。

さらに、江乙はこのたとえ話のあとに、こう言った。

「王様が治めている領土の広さや軍隊の力には、他の国のだれも及びません。王様は、それらをすべて宰相に任せていらっしやいます。それゆえに、他の国々が王様よりも宰相をおそれているなどといううわさも立つわけですが、他の国々が本当におそれているのは、宰相ではなく王様の強大な力なのです。」

――線部「【A】のたとえ話」とありますが、江乙は、だれのことを「虎」に、だれのことを「狐」にたとえたのですか。次の

1 から4の中から、最も適切なものをそれぞれ一つ選びなさい。

- 1 宰相 2 江乙 3 王様 4 家臣

二 【A】のたとえ話から「虎の威を借る狐」という言葉が生まれました。次の1から4のうち、この言葉の意味として最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 他人の弱さを利用して都合よく事を進めること。
2 他人の権力や権勢などをかさに着ていばること。
3 他人の行動をよく見て自分の行動を改めること。
4 他人の失敗や苦勞に対し心からなくさめること。